

原刊景印

民國佛教期刊文獻集成

任繼愈題



民國佛教期刊文獻集成

任繼愈題

第 109 卷



南瀛佛教會會報

中國書店

南瀛佛教

第六卷 第一號

新
年
號



南瀛佛教會發行

○南瀛佛教會規則

第一條 本會稱爲南瀛佛教會，其本部、漸設於總督府文教局社會課內、

支部應其必要設置於地方、支部規則、別以定之

第二條 本會以本島在住之本島人僧侶、齊友之有志者及地位高級有名望家之外護者組織

第三條 本會欲涵養會員之智德、而聯絡內地之佛教、冀圖佛教之振興、開發島民之心地以爲目的

第四條 以欲達本會之目的故舉行如左之事項

一、開催講習會、研究會及講演會等

二、調查關於宗教之重要事項及發刊機關雜誌

第五條 本會役員置之如左

一、會長 一名 推戴臺灣總督府文教局長

二、顧問 一名 由理事推薦

三、副會長 一名 推戴臺灣總督府文教局社會課長

四、理事 若干名 由會員選舉

五、幹事 若干名 同

但由地方之事情理事得兼幹事

第六條 會長總理會務並代表本會

顧問補佐會長

副會長補佐會長、會長若有事故之時可以代理

理事受會長之命、掌理會務

幹事受會長上之指揮、從事庶務會計

第七條 會長對於會員中、有學識德望者命爲教師、使其傳道布教

第八條 本會會員四種分爲如左

一、通常會員 會費年額納金二圓者、但得每年三月九月二回分納

二、正會員 會費年額納金五圓者、但納期與通常會員同

三、特別會員 一時納付金五十圓以上者

四、名譽會員 碩學高德或於本會特有功勞者推薦之

通常會員及正會員之會費、繳納期間、限爲十箇年、若一時會費全部繳納者、通常會員金十六圓、正會員金四十圓也

第九條 本會會員交付會員證及徽章、但徽章、再下附之時當徵收實費

第十條 會員退會或除名之時、前納之會費、均不退還

第十一條 若欲入會者、明記住所姓名及職業等、以會員之紹介、方可申

込本會

第十二條 倘若會員有污本會之面目、而怠於會員之義務者或有除名

第十三條 本會每年四月開開總會、而報告一箇年中之會務及會計、其他

決議重要之事項

第十四條 本會々々、則、非得役員三分之二以上之贊成者不得變更

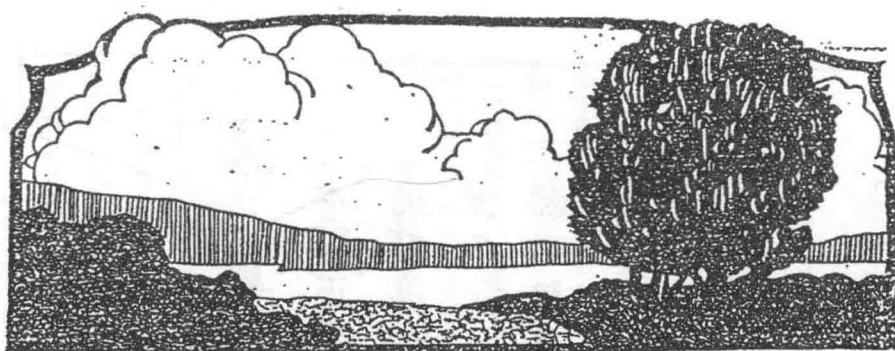
寄稿者各位に

謹賀新年

本誌正月號發刊に際し前號竝書面を以て玉稿御願申上候處
時節柄御多忙中にも不拘早速御惠贈の榮を得候段御芳志感
佩の至に不堪候各位の玉稿に依り本誌に一段の光彩を加へ
候は勿論讀者に取りても裨益する所不尠と被存候尙ほ將來
共充分御援助の程切に御悃頼申上候

先者乍略儀以誌上厚く御禮申上度如此候 敬具

南瀛佛教編輯部員一同



南瀛佛教第六卷第一號目錄

卷頭辭

法 幢

林述三

觀音普門品講話

論 壇

吉田萬賴

靈魂不滅論

昭和の理想

佛教と社會事業(六)

現代文明に與へる短評

阿含の佛陀觀(二)

大乘佛教と小乘佛教

風流と精神修養

法 幢

法性宗哲學(三)

論 壇

三國佛教略史(續)

佛學略說

勿忘建設現世的淨土

林珍宗

許林

高執德

小知單

芝原玄超

鶴林利見

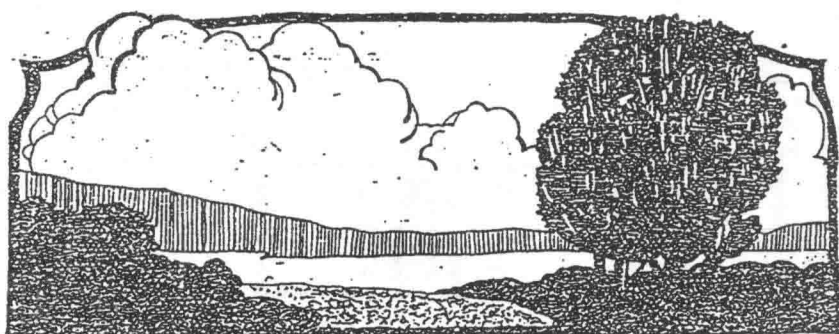
杵淵義房

李添春

會景來

林證峯

吳眞玉



說苑

年說

龍

查

降龍說

查

龍女天龍說

查

應無所住而生其心說

查

龍參護禪說

查

悟微天龍一指禪說

查

九龍吐水說

查

若言有佛即爲謗佛說

查

新歲芻言

查

新龍女影片

查

竝蒂蓮(三)

查

想華

怪怪唐山

星星

查

詩話(二十四)

怪星林述三選

查

會報

查

雜

報

◆映鷺「亞細亞之光」計劃製作後篇◆中華竺庵達如兩法師來臺及消息◆本島未見之莊嚴臺北臨濟寺之佛前結婚式◆臺灣宗教情報(一)◆臺灣宗教情報(二)◆員林釋放者保護會開會◆曹洞宗沙止布教所入佛式◆本會第九回講習會講師忽滑谷博士以病故來臺不果◆王兆麟氏之精神作與詔書圖解

謹 賀

南 瀛 佛 教 會

同	同	同	同	同	同	理	副	會
						事	會	長
趙	黃	劉	釋	陳	沈	江	坂	石
登	智	蘭	覺		本	善	口	黑
旺	武	亭	力	火	圓	慧	主	英
							稅	彥
同	幹	同	同	同	同	同	同	同
	事							
林	徐	林	施	林	陳	王	龔	洪
仁	朝	朝		永	啓	兆		
榮	鳳	木	漢	定	貞	麟	宗	池

新 年

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
魏	廖	黃	林	林	許	黃	洪	周	葉
得			峻	德		開	連		普
圓	炭	監	山	林	林	郎	興	田	霖
衆	同	同	教師補	同	同	衆	教師	同	同
林	蔡	蔡	沈	王	沈	許	張	林	黃
德		敦	德	兆	本		妙	梅	文
林	遇	輝	融	麟	圓	林	禪	清	慶

謹賀新年

文教局

同	同	同	同	同	社 寺 係 員	社 會 課 囑 託	社 會 課 長	文 教 局 長
森	楊	江	甲	原	松	杵	坂	石
田			斐		崎	淵	口	黑
千	太	木	壽	友	貞	義	主	英
代	平	生	男	次	吉	房	稅	彥



歲月輪轉。人事代遷。都有隨處現來景象。其千變萬化。不可億度之勢。非若蘇子瞻之言水與月意。以爲逝者如斯而未嘗往。盈虛者如彼而卒莫消長。那可執一而論。若歐陽子之渥然丹者爲橋木。黧然黑者爲星々。非金石之質。欲與草木爭榮。是知草木又歷一世矣。人亦澹然將老矣。眼界中自具無限觀感。夫去年丁卯今年戊辰。記昔年是亦丁卯戊辰。而人之昔年蒼々者。今則化而爲白矣。物我皆無盡之言。特一時之豪語快語耳。物我有盡也。惟命名爲無盡歟。佛之不生不滅說。其亦命名之旨歟。佛爲明心見性故云。然明心見性。而可以不滅不生。此軀殼之問題不關。亦若儒之存其心養其性所以事天也。樂天者保其性。吾人與天地參。值此迎新送舊之期。宜養育萌芽之氣。共明陽之助。隨時順化。立德立功。享長年之幸福。梵門子之修持其可忽乎哉。其能消受此輪轉歲月。變遷人事者。要有工夫在。此工夫二字。最有價值也。工夫者何。則不生不滅之作用也。近世多鬭爭不能適取。是以慈悲必須菩薩。鼎足人羣。欲超世外。仔肩冒昧。是人行邪道。不能見如來。青春景好。勿負時期。宜勵精作個真語。應龍光大來之瑞。(尤)



法
幢

觀音
禮讚

觀音普門品講話 (一)

臨濟宗布教監督

吉 田 萬 籟

一心に請し奉つる。南無現座道場大慈悲文廣大靈感觀世音菩薩、伏して翼くは本誓に違はず。此の道場に降臨して現前の清衆を擁護し。大悲の加被力に依つて。假令一念一刹那の間と雖も。無始劫來の我見偏執を捨て。寂定無爲の大

光明に入らしめ。彼我同體凡聖不二の妙境に。遊化三昧ならしめ給へ。

道友各位には。御健祥にて目出たき新年を迎へさせられ。慶賀の至りに存じます。

私には羨望始めての御正月であります。新年の目出度きことは。千里同風でありますから、臺灣だと云つて別に違つたこともありませんが然し内地とは多少時候が違いますので。御正月が來ても。内地の様に初雪など云ふ。洒落た風光に接することが出來ない位なことで他は皆同様であります。

私は目出度き本日、第一回として觀音普門品の講話を始めすることに致しました。

本題に入る前提として、特に皆様に御願申して置きたいことは吾々は堅き觀音信仰よりして。

我は觀音たらねばならぬと自覺し

我は觀音たり得ると安住して……

此の講話を聽いて頂きたいので有ります。總じて宗教上の話を聽くには。第一に信念と云ふことが、必要條件で。此の信念がありませぬと。折角の御話も何等所詮もなく、唯だ一場の談話として終ることになりますから。此の點は特に御注意を願つておく次第であります。

さて我は觀音たらねばならぬ。我は觀音たり得ると云ふ信念は。普通に考へますと。餘りに理想が高遠すぎて。不安懷疑煩

悶で。充たされた吾々人間には絶対に不可能の様に思はれすが、佛教の道理を聽き。深く佛教を信じて見ますと吾々は此の身此の儘觀世音菩薩たり得る、本質を持つて居ることが明かに了解されるので有ります。

釋尊は。吾々人間が佛陀たり得る、本質を持つて居ることを體驗されて、

一切衆生は悉く佛性あり

と高唱し、更に進んでは

草木國土悉く皆佛と成る

と道破され。觀音普門品には。此の信念を以つて禮讃すべき、歸依佛として。觀世音菩薩を指示されたのであります。

一休禪師は

一寸線香一寸佛。　　寸々積成丈六佛。

三十二相八十種。　　自然莊嚴本來佛。

と云つて、吾々人間は先天的に佛陀たり得る本質を持つてゐるのだと。人間禮讃の偈を頌して居られます。

白隱禪師の御師匠様であつた信州飯山の正受老人は。幼少の時觀音様を得意とする詭師に、坊にも觀音様を寄いて下さいと

頼まれたら、其の禪師はなんと思ひましたか。私に書いて貰はなぐとも。坊は立派な觀世音菩薩を所持してござると申しましたので。正受老人は幼な心に不審を起し。長ずる儘に佛書など讀んで居られたが。曾つて禪師から聞かされた、坊は。尊い觀世音菩薩を所持してござると云ふことが更に深く疑問となつて。日夜不斷に工夫を凝らして居られたが。十五六才の時、或日のこと二階に昇ふとして階段で足を踏みすべらし。階下に墜落して人事不省に陥り覺醒した瞬間豁然として。

我れ即ち觀世音菩薩なり。

と大悟されたのであります。

此の意味よりして考へれば。豈に獨り正受老人のみならんや。吾々も亦尊き觀世音菩薩を所持して居ることは確實であります。

釋尊が普門品に理想の歸依佛として、指示された觀世音菩薩は、大慈悲。大智慧。大勇猛心。の摩訶三徳を完備された御方だと申しますがこれを吾々人間の上から申しますと。この三徳は觀音信仰の力に依つて。純淨化せられた。明かなる智慧。麗はしき感情。堅固なる意志であります。

さて觀世音菩薩の歴史に就ては。印度に於ける歴史があり。又支那に於ける歴史があります。

我が日本に於ける觀世音菩薩の歴史は。古く推古時代から始るのであります。

既に此時代よりして。觀音信仰が、

上は王候より。下は一般民衆にまで

行はれて居たことは歴史に明かな事實であります。

其の代表者とも申すべきは。推古朝に於ける日本文化の父に在します聖德太子で有ります。親鸞聖人の和讃には。救世觀音大菩薩。聖德太子と示現して。多々の如くに捨てずして。阿摩の如くに添ひ給ふ。と有りますが。

太子御自身にも亦我れは觀世音菩薩の化身であると云ふ、堅き信念を所持して居られたのであります。攝政宮に在しまして政治をみそなはせ給ふ時は。必ず夢殿に籠つて觀音三昧の觀法を修し而して後。天下の經綸を御立て遊ばしたと云ふことは有名な御事蹟として歴史に傳へられてあります。

又太子は社會救済の御事業としては。大阪天王寺に四箇院を御建立遊ばされたことであります。

四箇院と申すのは。施藥院。療病院。悲田院。敬田院。のこ
とであります。

施藥院

これは貧民の病者に施藥をする所であります。

療病院

これは貧困な病者を宿らして。厚く療養を施す所でありま
す。

悲田院

これは今の養老院。孤兒院の如きもので貧民に食物衣服等
を與へて收容する所であります。

敬田院

これは今日の感化事業と。教化事業を兼たもので云はゞ思
想善導の道場であります。

斯の如く聖德太子が。一般民衆の爲に慈善救済の事業を企て
給ひしことは。觀音信仰の御心より發したる大慈悲心の現はれ
であります。

光明皇后の御事蹟は。既に御承知のことと存じますが。皇后
は觀音信仰の御心よりして宮中に湯殿を御拵へに成り。貧しき

民衆の爲に施浴をなし。畏れ多くも金枝玉葉の御身を以つて湯
女と成り。御自ら入浴者の背を御流し遊ばされたと申すことで
あります。

平安朝時代になりますと。更に觀音信仰は盛んになりまして。
田村將軍は。觀音の信仰よりして。京都清水に觀世音菩薩の一
大靈場を建設されました。

又華山天皇の觀音信仰は。西國三十三箇所聖蹟の御巡拜とな
つて現はれ。今尚ほ一般民衆の間に誦はれて居る御詠歌は。其の
時華山天皇が御製遊ばしたものととして歴史に傳へて有ります。
華山天皇は。愛妃弘徽殿の御早世に依つて

切なる無常觀を發され。皇位を棄て

山科の里元慶寺に入り給ひ……………

御落飾遊ばされ。法名を入覺と稱し。佛眼上人の勸めに依り。
觀世音菩薩の靈場の御巡拜を發願され。數人の從僧を御伴とし
て。畏多くも至尊の御身を以つて玉歩を所々の靈場に運ばせら
れ。純淨なる觀音信仰の生活を御體驗遊ばされた。これ我が日
本に於ける三十三箇所觀世音菩薩聖蹟巡拜の嚆矢であります。
臺灣には。内地のその如く。三十三ヶ所と定められた觀音の

靈場は未だありませぬが。北部臺灣では觀音山の中腹に在る凌雲禪寺が觀世音菩薩の靈場として多くの參拜者を集めて居ります。然し本島人の觀音信仰の中心は。對岸なる支那舟山列島の普陀山であります。

臺灣歴史には。今から二百四五十年前。和蘭艦隊が臺灣征討の初。彼等は舟山列島に至り觀世音菩薩の一大靈場として。支那人の最も信仰篤き普陀山に登つて。さきに金門厦門に於て。寺觀佛像を破壊した同様に普陀山に於ても。寺觀佛像の總べてを亂暴にも破壊したのであります。

そして。將に舟山列島を去らんとした時。俄に天地晦暝となり。雷電閃々と同時に暴風雨となつて。怒濤澎湃たる海中より。鐵蓮華が無数に突出して。和蘭軍艦を串刺にして。海中に沈没さしてしまいました。

これは普陀山觀世音菩薩の靈驗の致す處で尊き佛像寺觀を破壊した佛罰だと書いてあります。

本島人は斯様な歴史を持つて居る處から觀世音菩薩に對しては。更に深刻な信仰を持つ様になつた者だと思はれます。

目下内臺人の有志に依つて。發願されてある至爲に涉る。三

六

十三箇所觀音靈場建設の淨業が。愈々實現されるとすれば。本島に於る。觀音信仰は尙一層盛大に赴くことゝ存じます。

私は觀音信仰の最も盛んな。臺灣の地に於て。更に目出度き本日を卜し。觀音普門品の講話を始め。觀世音菩薩を禮讃し奉ることゝは最尊無上の光榮とする處であります。
(未完)

謹賀新年

南瀛佛教編輯處

林述三
江木生



靈魂不滅論

西本願寺輪番

芝原立超

本問題は、神佛の實在、地獄極樂の有無の二問題と共に宗教を求むる者に取つての三大暗礁の一つであつて是等に相當の解決を與へなければ、信仰の港に入る事が困難である、就中靈魂の不滅は、自己の主觀的問題として之れが定まらねば宗教たるの意義をなさないのでみならず道德實踐上の基礎が無くなる譯であるから成るべく通俗的に之を説明しやうと思ふ。

凡そ何れの宗教に於ても靈魂の不滅は之を唱へるが併しその靈魂の物體、並に不滅の理由に付ては、教義の淺深に依て區々に分れて居る。

今比較的優秀なる説を綜合すると大別二つになる様である。
一には精神を以て即ち靈魂とする説、二には精神の、もう一つ奥に靈魂の物體を認むる説で、何れも肉體の死に依てその依所